

## 勿凝学問 354

要するに、社会保障をケインズが語るかフリードマンが語るかなんだよな

1月25日の閣議決定「新成長戦略2011」を眺めてのちょっとした感想

2011年1月28日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

明晩の酒のつまみは、成長論(?)。

ということで、つい先日1月25日の閣議決定「[新成長戦略2011](#)」なんかを、徒然と眺めていた。その中に、「20世紀型成長モデルでは、経済成長と環境・社会保障とが緊張関係にあるのに対して、21世紀型の成長モデルでは、これらが補完・強化し合う。こうした成長のパラダイムシフトは、日本のみならず世界全体で発生している」なる文章をみて、なんだかなあと思う。

だってだよ。僕の指導教授だった藤澤先生は、初出1972年の論文に——だから先生42歳の時——次のように社会保障の機能をまとめているわけだ<sup>1</sup>。

ベヴァリッジの先導にしたがい、イギリスははじめ各国で実現していった社会保障による再分配メカニズムの設定は、ケインズの視点にたてば、それなりのスケールをととのえているかぎり、ミクロには、基本的ニーズの制度的確保を通じて家計支出構造を合理化して「貯蓄表の水準を大幅に引き下げ」(クライン)、マクロには、「あたかも、購買力を広く全国にわたって分配する大きな灌漑組織のような役割をする」(ハンセン)から、経済活動の流れの順調な続行に必要な家計の予備の社会化を果たすことになり、「個人消費の拡大と維持によって、雇用の支持に大きく役立つ」(ベヴァリッジ)ことを期待され、また、戦後の経済発展のなかで確実な政策効果を収めてきた。

藤澤先生は1972年に上のようなことを書いているんだけど、そこに引用されているクラインとハンセンの本は共に1947年、ベヴァリッジの本は1944年。なにも、21世紀の成長モデルなんて、大げさに言う話じゃないと思うんだけどねえ。

みんな知らなかったただだろう(。-)ボソ...

---

<sup>1</sup> 藤澤益夫(1997)『社会保障の発展構造』慶應出版

先生が67歳でまとめたこの本は、先生が、むかあしから書いた論文をまとめた本。

まあ、藤澤先生の文章は、えらく難しいから、他の引用もしておけば、先生は、1975年（先生45歳）に出ている『老齡保障論』の中のひとつの章「年金制度の機能」を担当していて、年金制度を論じる際に、社会保障そのものを論じるところから説き起こし、次のように書いている。

社会保障は、国民経済的にみて、資本主義の高度化につれて進行する生産と消費のアンバランスを、所得再分配を通じて補整する経済機構である。それゆえ、この機構がもたらす所得再分配の程度と方向が、政策効果を多く規定している。

僕や嫁は、大学3年生で入ゼミしてすぐにこういう文章を読みはじめていたわけで、毎年の藤澤先生のテストの問題は、「資本主義の発展段階における市場構造の変化と社会保障の機能について論ぜよ」というようなものだった。

でも——当時は、よくわからなかったし、なによりも、僕らが大学生だった1980年代は、ケインズ経済学ってのはかっこ悪かった（笑）。だから僕は、4年生の頃とかには、う～ん、うちの先生の社会保障論はちと古いのかもしれないなあ、なあんて思っていたりもしていたもんだ——すみません。

だけど、少しずつ、藤澤先生が言っていたことの意味が分かるようになり、留学もケンブリッジに行きたくなるし、社会保障の研究者なのに、学生に課す課題は経済学の古典、おまけに学生に指定する教科書もケインジアンが書いたもの、そして僕自身は「成長論」として論じることの出来ることと出来ないことなどに妙にうるさい、社会保障研究の中で仲間がいない研究者になったわけだ（笑 否 涙?）。

ところで、昨年、時の首相が、「強い社会保障」とかなんとか言い始めた。僕自身は、「強い社会保障」なんて言葉は大っきらいで、社会保障は市場経済のサブシステムに過ぎないのだから、そんなに前面に出てくるなんて分不相応に目立ちすぎてみっともないだろうと思っているのだけど、首相が「強い社会保障」なんてことを言ったとき、昔ながらの経済学者達が、一斉に、経済学の教科書通りに、経済成長と社会保障が緊張関係にあることを、いたる媒体を使って批判していたシーンをみるのは、なかなか楽しいものがあったわけだ。

あのシーンの中にいた彼らは、僕が大学生の頃、社会保障が経済政策の手段だということを知っていて、ビックリしたのと同じショック状態にいたのだろうし、ちょうど、淡水魚が海水に入れられたら、呼吸できずにピクピク引きつけを起こしているようなものに見えたもの。彼らはいずれ、海水に慣れるか死ぬかのどっちかなんだけど、そりゃあ、それまでフリードマン流の新古典派経済学ばかりを勉強していたら、絶対に受け入れられない考えではある。

学説史的に表現すれば、50年代、60年代にケインズ経済学は黄金時代を迎えていたわけ

だけど、次の図にみるように 1971 年の固定相場制の崩壊にオイルショックが重なって猛威をふるったインフレ期に、主流の経済学がケインズ経済学から新古典派経済学に入れ替わった。



この図をもとに論じたスキデルスキーの言葉を借りれば<sup>2</sup>、

ブレトン・ウッズ体制の時期には固定相場制がインフレを抑える錨になっていた。ワシントン・コンセンサス体制の時期には、各国中央銀行のインフレ・ターゲット政策が錨になっている<sup>3</sup>。二つの時期の間にあたる 1970 年代にはインフレ率が急騰しており、1971 年に固定相場制が崩壊したことがその主因であった。

新古典派経済学の世界では、突き詰めていけば、マクロ経済学の居場所がなくなるわけで、アメリカの経済学教育からマクロ経済学が消えていくことにもなっていた。そんな時代に、遊び心を持たずにまじめに経済学を勉強した人たちに、今になって社会保障の話聞いてみても、詮無いこと。彼らが学んだ経済学の中では、社会保障はただの邪魔者でしかない。

だけど、2008 年のリーマン・ショックの後に、いきなり多くの経済学者がケインジアンになったわけだけど、本当の話、その多くは、若い頃に、ケインズを勉強してないはずなん

<sup>2</sup> スキデルスキー(2009)〔山岡洋一訳(2010)〕『誰がケインズを復活させたのか?』日経新聞社, pp.190-1.

<sup>3</sup> ここでスキデルスキーは、「錨(アンカー)」と表現しているわけで、デフレ時のインフレ・ターゲットの話はしていないことに留意。

だよ。余談だけど、僕は、2003年に「積極的社会保障政策と日本の歴史の転換」を書いた時、ケインズが生きた時代とは違った次元での政策として、「第2次ケインズ革命」を起こすべしと言ったりしたんだが、そういう表現をすれば、論文の評価が落ちることは分かった上で書いていた。その翌年にこれを本にした時も、ケインズという言葉を出せば本の評価が落ちることが分かった上で書いていた。当時できえ、ケインズを語るなど、かなり浮いたものだった。ここだけの話、あの論文を書いた時、喜んでくれたのは、僕が第一の読者として想定して書いた、うちの先生だけだった（笑）——他に、当時まったく面識がなかった伊東光晴先生もそうかな（書評）。

そういう時代を、経済学の世界で生きてきた僕からみれば、2008年のリーマン・ショック以降、にわかケインジアンが続出してきたのは、みんな生きるためには凄いいことやるなあとなかなか感心するものであったし、翌2009年に、ケインジアン系の社会保障論が政策のアジェンダとして表に出てきたとき、条件反射的にフリードマン系の経済学で、懸命に批判している人たちをみて、微笑ましいものがあった。

さて、冒頭に戻れば、新成長戦略2011の「21世紀型の成長モデルでは、これらが補完・強化し合う。こうした成長のパラダイムシフトは、日本のみならず世界全体で発生している」なる文章をみたとき、藤澤先生が生前に言っていた、「俺たちがもっとちゃんとやっておかなきゃいけなかったんだけどなあ」という言葉を思い出したわけである。

ここはなかなか難しい話で、1970年代にケインズ経済学からフリードマン経済学に主役が変わったただ中で、藤澤先生が、どんなに頑張って仕事をしていてもね。社会保障研究、社会保障政策というのは、時代時代の主流の経済学に従属する、そういうものだと思う。

そして今、3日前に閣議決定された新成長戦略2011で使われている「パラダイムシフト」という言葉を使って、スキデルスキーは、次のように語る<sup>4</sup>。

科学史家のトーマス・クーンは大きな影響を与えた『科学革命の構造』で、ある時期に主流を占めていた科学理論がくつがえされるのは、「変則性」が蓄積していくからだとして論じている。主流の理論では予想されない事実があつて、特別の説明を加えなければならなくなる。これが積み重なって、プトレマイオスの天文学はコペルニクス革命でくつがえされ、ニュートン物理学はアインシュタイン革命でくつがえされ、などなどである。新古典派マクロ経済学でもやはり変則性が積み重なっており、今回の危機が直近の例であり、とりわけ顕著な例である。新たな「パラダイム・シフト」が起こっても不思議のない状況になっており、新しいパラダイムは、不確実性という条件のもとでの行動の性格を深く追求したケインズの理論を基礎にする必要

---

<sup>4</sup> スキデルスキー〔邦訳〕, p.178.

がある。

昨晚の会合でも言いましたように、僕の年金論は、将来の不確実性に関して、リスクではなくケインズ流の不確実性を前提とした年金論です。そして、高齢者の生活扶養の方法がどんなものであろうが現役世代の負担の総量は変わらず、「給付が負担<sup>5</sup>」であるということもケインズ的な考え方なんですよね。

さて、スキデルスキーが言うように、本当に、最近、経済学の世界でパラダイム・シフトが起こったのであれば、80年代、90年代に、遊び心を持たずに一所懸命に教科書に書いてある経済学を覚えた人ってのは、今後、役立たずになるんだろうな。そんな人たちに、社会保障を語らせるなんて、フリードマンに社会保障を語らせているようなもんだよ。インタビューする人たちは、気をつけないとな（笑）。

おまけ

スキデルスキーが登場する文章

勿凝学問 295 [やっぱり、経済学が悪いのではなく経済学者が悪いんだと思う——経済学教育方法考](#)

初出 2003年の「積極的社会保障政策と日本の歴史の転換」のダイジェスト版

勿凝学問 172 [積極的社会保障政策という景気対策——社会保障重視派こそが一番の成長重視派に決まってるだろう](#)

フリードマンが登場する文章

勿凝学問 260 [フリードマン的批判とは？——制度への理解に自信のない者とエセ研究者がよく使うお手軽な手段](#)

---

<sup>5</sup> 「給付が負担」という言葉は、玉木伸介さんの言葉です [『年金 2008 年問題—市場を歪める巨大資金』日経新聞 2004 年]。